

BATTLE BALLER

HARUKA

II-4

宇宙へ

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第二集

星間戦争

第4章

宇宙(そら)へ

作・ Ψ (Eternity Flame)

「お兄ちゃん。」

「なんだ？」

「パーピリオン星人達の言ってた“約束の日”って今日じゃないの？」

「ああ、そうだな。」

「いつ行くの？」

「“宇宙へ”と言う事か？」

「うん。」

「今晚行く。それまで二人とも休め。」

「分かったわ。」

その夜―

「これから宇宙へ行く。準備はいいか？」

「うん。」

「はいよー！いやぁワクワクすんな。」

勝つ気満々の正友は、遊びにでも行くかのように嬉しそうにしている。

「でもどうやって月まで行くの？」

そんな正友とは反して、月までの道のりの遠さを冷静に考えるはるか。

「その心配はいらない。」

「でもどうやって...」

「それは儂から話そう。」

「おじいちゃん！」

鮎吉が言うには、はるか達を架空(かくう)の眉山(びざん)へと送った技術の応用で、月の近くへと三人を送るのだと言う。

その時と同じように、はるか達の体が光り輝くと、鮎吉の眉間(みけん)へとその光は溶け込んでいった。

「はるか！正友！」

「はい。」

「何なん？」

「今の内にケルビムに搭乗(とうじょう)しとけよ。」

「うん。」

「分かってるよ。」

空間を転送されていく道中。はるか達は秀樹の指示通り、ケルビムに乗り込み戦いに備えた。異次元を渡り終える出口には眩しい光が差していて、そこを抜けると、漆黒(しっこく)の闇に無数の星々が遠くに散りばめられた宇宙空間が広がっていた。

「ようこそ宇宙へ。」

出迎えの声の主は、十日前にはるか達に決戦の日どりを告げた者からの物であった。

「約束どおり着たぞ。ジャギとか言ったな、ところでどうやって戦うんだ？」

「その前にルールの説明も兼ねて話をせんか？我らが主、ポモプン様のご命令で、お前達を手厚くもてなせと言われておるからな。」

「ああ。それはこちらも望むところだ。“ポモプン”と言うのがお前達のリーダーの名か？」

「そうだ。正式なご尊名(そんめい)は、パニャホニョロカポモプン 1 3 5 世様だ。」

「...そうか。パーピリオン星人は何処に住んでいる？」

「定住はしていない。他に訊きたい事は？」

「パーピリオン星人の人口は？」

「我らが偉大なる王を含め4人だ。」

「4人!?!...たった4人なのか？」

「お前達のような、生物として未熟(みじゆく)な輩(やから)には分からんだろうな。」

「ほーう。究極(きゅうきょく)の生物さんとやらは“数”より“質”ってワケかい。」

自分達を遠回しに下等だと見下すジャギに、正友がキレ気味にそう口を挟んだ。

「そんな所だ。」

ジャギは余裕な感じで正友の問いかけにそう頷(うなづ)いた。

「それにしても垢抜(あかぬ)けない顔してるな。」

「何ィ！」

秀樹は相手が気にしてる事を平然と言っただけ。緑色のナメクジが人型をしたようなジャギのルックスは、確かにパツとしない物であった。

「これはオレの顔ではないわッ!!」

「じゃあ何なんだ。」

「お前達の乗っておる“ケルビム”と同じような物だ。」

「なぜ、その名を...？」

「我らが王であらせられるポモプン様も、お前達と同じ“心拳”の使い手なのを忘れたか？」

「...なるほどな。だが“俺達と同じ”と言うのであれば、何故“神”などと名乗る？」

「それはこれから戦えば分かる事だ。ルールは簡単。三対三の団体戦だ。」

「そっちのあと二人はどこだ？」

「お前達のすぐ後ろにいる。」

「何ッ!？」

秀樹達がふり返ると、二体の動物のような巨大な影が立っていた。

「げッ!?!いつの間に...。」

正友は思わず驚きの声を漏(も)らしてしまっていた。

「フッ。俺達の背後を取るとはな。」

そう言って秀樹は頭の中を切り換える為に目を閉じ、相手の実力を見極めんとするような視線で見返すと、再びジャギと話し出した。

「こっちの二人の名を教えてくれ。」

「我が名はギエン。」

スフィンクスのような姿をした怪物が、そう自ら名乗りを上げた。

「我が名はダイキ。」

もう片方の怪物は巨大なカメのような形を成していて、それがそう名乗った。

「団体戦と言ったが、集団で戦(や)るのか？それとも順々か？」

「こちらはどっちでも構わん。」

「なら一対一で同時に始めよう。あと、最後に一つ聞きたいのだが。」

「何だ？」

「ポモプンとかいうお前達の王様はドコにいる？」

「我らに万が一でも勝つ事ができたなら、王が直々(じきじき)に現れ相手されるであろう。」

「フッ...なるほどな。」

「準備ができたなら我らの元へ来るがよい。」

秀樹とジャギの会話が終わると、ギエンとダイキが合戦の合図を告げるかのように大きな声を上げた。その雄叫(おたけ)びは猛獣(もうじゅう)のような低い迫力のある声で、はるか達を威圧した。

「お兄ちゃん、作戦は？」

「俺はあのジャギとかいうリーダーっぽいのと戦る。お前達は互いに意識しあって互いをカバーしながら残りの二人と戦え。相手の能力が分からんから、とりあえずはそれで様子を見よう。」

「分かったわ。正友はギエンと戦って！わたしはあの亀みたいなのと戦うわ。」

「なんでお前が仕切るんだよ...ま、いっか。」

「はるか。一対一でとは言ったが、危ない時はお互いに助けあえよ！」

「お兄ちゃんは大丈夫なの？」

「俺は何とかするさ。」

秀樹の事が心配ではあったが、そう言われて、はるかは目の前の敵に専念する事にした。

「行くぞ!!」

秀樹の掛け声と共に、三人はそれぞれの敵を目指した。

「スプレッドフライフィッシュ（海王連弾）！！」

秀樹が先制の弾幕(だんまく)を放ち、ジャギ達を三方に散らせた。

「うっひょ～！すんげえミサイルの数だな。」

「呑気(のんき)な事言っていないで、集中しなさい！」

緊張感なく脇見をする正友に、はるかがダメな弟を叱りつけるようにそう言った。

「分かってるよッ！」

そう言い返した正友。いい加減にしていたのではなく、しっかりと彼は自分の敵を視野に捉(とら)えていた。風の特性を生かした抜群(ばつぐん)の探知力(たんちりょく)を用い、はるかが自分の標的に気づく頃には、すでにスタートを切っていた。

「お先ッ!!」

「あっ!？」

正友の行動の速さに、はるかとの立場が逆転してしまっていた。三体のケルビムの中でも、随一(ずいいち)の加速力を持つ銀竜。ドライブモードでの飛行は、抵抗の少ない宇宙空間ではその速度を一段と増幅させている。その勢いに乗じて、正友のボルテージもうなぎ昇りに上昇していった。

「決める！出でよッ九天霸王剣(きゅうてんはおうけん)!!」

ノッてる正友らしい派手な龍の装飾(そうしよく)が施(ほどこ)された剣。それを背中から抜くと、正友はいきなり勝負を決してしまおうとした。

「喰らえッ！真空断烈刃(しんくうだんれつじん)!!」

剣を持った時には既(すで)に人型に変形しており、その身のこなしの早さは、まるで役者が舞台上で早着がえをした時のような艶(つや)やかさを、そのプロセスに見せていて、まさに正友の演じる戦場での舞台公演といった感じであった。

本人もそんな感覚で“演じている”という様子であったのだが...次の瞬間にその自己陶醉(じことうすい)は一気に醒(さ)めてしまう事になる。なぜなら、持ちまへのスピードを最大限に生かした無数の斬撃も、ギエンの機体の強度の前に有効打とならなかったからである。

「硬てェ〜...何だコイツ!？」

「お前が我の相手か？」

ギエンが正友に聞いた。だした。

「おうよ。かかって来いやッ!!」

自信満々にそう答えた正友。分かりきった会話をギエンが投げかけたのには理由があった。正友に質問をして彼が答え終わると、ギエンの機体[ファラオスフィックス]が口を開いた。その口から凄まじい熱量のビーム砲が発せられた。自分から会話を仕掛けて、ギエンは正友に隙を作らせていたのであった。

—その頃

「レッドスタークロス!!」

銀竜から少し遅れて、レッドクラウンが両腿(りょうもも)から取り出したトンファーで、ギエンと交戦を始めていた。遠距離からドライブモードで詰め寄るまでの間に、初太刀(しょだち)となる両翼(りょうよく)からの機銃(きじゅう)掃射(そうしゃ)を浴びせての接近戦。定石(じょうせき)通りと言おうか、基本に忠実(ちゅうじつ)な戦いぶりを見せていた。

ダイキの機体は亀(かめ)に似ていて、首と手足を引っ込めると、はるかの全ての攻撃が、堅い甲羅(こうら)の前に無に帰すかのように防がれてしまった。

「その程度の攻撃では、このキラーカーリングにカスリ傷ひとつ与えられんわ!!」

その言葉に怯(ひる)むはるか。どうやってダイキの機体を攻略すればいいのか悩んでしまった事が、一瞬、彼女を気後れさせてしまっていた。

「ミノタウロスモード（牛魔人変化(ぎゅうまじんへんか)）！！」

人型に変型したキラーカーリング。四肢(しし)は長く伸び、顔立ちは亀のままだが頭に角をはやした牛魔人となって接近戦を仕掛けてきた。

両手に斧(おの)を持ち、レッドクラウンへ向かってそれを振り回してきた。トンファーでその打撃を受け止めたのまでは良かったが、一撃の重さにコックピットまで衝撃が伝わり、頭が痺(しび)れるような感覚を受け、ほんの一瞬だが、はるかは気を失わされてしまった。

ミノタウロスのもう片方の斧(おの)が、その隙(すき)を容赦(ようしゃ)なく突いてきた。ギリギリの所で意識を取り戻したはるか。動力を全開にして難を逃れると、その先にはギエンの攻撃から逃れた銀竜がいて、二機が背中合わせに重なっていた。

「どうだ？ 敵は。」

「凄いパワーだね。危うくやられる所だった。そっちは？」

「オレも口からスゲエの出されて、ちょっとビビった。」

背中合わせの二機を引き裂くように、ダイキとジャギの機体が集中砲火を浴びせてきた。二人の会話は途切れたが、はるかとは正友はお互いを意識し、おおよその距離感を掴(つか)めるに至っていた。

一方、秀樹はというと、熾烈(しれつ)な肉弾戦を繰り広げていた。はるかとは正友よりも一回り大きなラグナクエストは、圧倒的火力で、ジャギを追い詰めているかのように見えたのだが...

「それが限界か？」

「何ッ!？」

黄緑色をした巨大なナメクジのようなジャギの機体が人型に変形し、何をするのかと思いきや、全ての弾頭・弾丸をボディーに受け止めてしまっていた。そして、全弾が爆発する前にのみ込むようにして吸収してしまっていた。大気を遮断(しゃだん)する事により、発火源(はっかげん)を失くした為、秀樹の放った爆撃(ばくげき)は何の反応も示さず無効化されたのである。

「コバルトブルーセイバー!!」

ラグナクエストは金棒(かなぼう)のような剣を取り出し、二刀流でインファイトに備えた。思考面に長(た)けた秀樹の直感が、あらゆるケースを想定し、攻防のバランスをとっさに取ったのである。しかし、ジャギの攻撃は秀樹の予想の範疇(はんちゅう)を超える物であった。

「こ、これは!？」

ジャギの攻撃は、一見して、両腕を使い獣のように標的を狩るだけのように思われた。しかし、バックステップして射程圏内(しゃていけんない)を出たラグナクエストの油断を覆(くつがえ)し、ソコからさらに伸びてきたのである。さらに腕は二本だけでなく、何本も後から後から現れてきた。

「フハハハ...手も足も出まい！！我がケイオスインセクターの毒牙にひれ伏すがよい。」

ケイオスインセクターの腕は伸びるだけではなく、柔軟性(じゅうなんせい)に富み、攻撃を捌(さば)くのは至難(しなん)の技であった。弾き返し続けた攻撃であったが、ケイオスインセクターの攻撃は少しずつラグナクエスト本体に近づき、ついに間近まで迫ってきて、指先が届きそうな程にまでなったので、秀樹は切り捨てようとしたのだが。

ケイオスインセクターの指を真っ二つに裂いたと思った瞬間、引き裂かれたはずの腕が二股になって伸びてきて、ラグナクエストのボディーに突き立った。

「ぐああああッ...!!」

ケルビムへのダメージは、一心同体(いっしんどうたい)である操縦者(そうじゅうしゃ)にも反映(はんえい)され、秀樹が痛みに悶(もだ)える声を上げた。

「フフフ。いい声だ。」

ジャギはその声を聞き、悦(えつ)に浸(ひた)った。すぐさま刺(さ)さった腕を切り落とし、危機を乗り切った秀樹であったが、ほっとする傍(かたわ)らで思い悩んでもいた。

はるか正友には、危機に陥(おちい)るならお互いに助けあうようにと指示し、自分が最も強いと見るジャギの相手をするという作戦は、まず秀樹が速攻でジャギを倒すというのが、必勝のための前提条件としてあったからである。

消去法的に、戦闘経験が豊富な秀樹が最も強い者の相手をしなければならないし、自分の力にも自信があって、誰一人倒れる者のない必勝を期した計算を元に作戦を立てたつもりであった。

イチ早く秀樹が目目の敵を倒し、数的優位に立った上で、残りの敵を殲滅(せんめつ)するつもりであった。それが思うようにならないと知り、はるか達の事が気になりながらも、眼前の敵に集中しなければならないジレンマとも戦っていたのである。

「我がケイオスインセクターは体の強度や伸縮性(しんしゅくせい)を自在に操れる。この戦法を破れる物なら破ってみよ！」

「...随分(ずいぶん)な自信だな。いいのか？種を明かしても。」

「聞いた所でどうにもなるまい！」

ケイオスインセクターのボディは、極小の金属片がより集まって構成されていて、それが変幻(へんげん)自在(じざい)を可能にしている事が、断ち切った腕の一部とジャギの言葉から確認できたが、そのカラクリがどうなっているかは分らず対策が立てられない。ジャギは攻撃の手を緩めず、それに対抗しながらの考察(こうさつ)に秀樹は苦戦を強いられていた。

「どうする？はるか。」

「二人で戦いましょう。」

「...そうだな。おい、パーピリオン共！」

正友の呼びかけにダイキが反応した。

「タッグ戦に勝負を変更だ！」

「よかろう。」

余裕でその呼びかけに応えるダイキ。まだ戦いは序盤(じょばん)であつたが、はるかはその強さを充分に感じ、秀樹の言いつけ通りに、お互いをカバーし合う方式で不測の事態が起こった場合への対処に備えた。

「サンフレアビュート[太陽熱鞭]！！」

「コスモスワロー[真空間クナイ]！！」

内力の高まりと共に新たな武器を出した二人のケルビム。しかし、手の内を伏せているのは、ダイキとギエンも同じであつた。

「ファラオスフィンクスよ。汝(なんじ)の偉大なる力を示せ!!」

そう言うと、ギエンの機体が四角錐(しかくすい)をした硝子(がらす)のような物に包まれた。まるで透明のピラミッドの中に、すっぽりと納まったファラオスフィンクス。

合流したキラーカーリングもその中に入った。すると、ピラミッドの頂点が二体の頭上から正面へと移動し、そこに向けて二体が光線をそれぞれに出すと、その頂点の部分に集約された光線が凄(すさ)まじい威力(いりよく)となって、ピラミッド内部から外へとエネルギーを放出した。

「ピラミッドフォース！！」

一点に集中された光線は、外部へ出力されると逆ピラミッドを描く拡散(かくさん)ビームとなり、はるか達を呑みこもうとした。

「おい、アレ行くぞ!!」

正友がそう言うと、銀竜がクナイを一挙に量産し、レッドクラウンの周囲を丸く包むと。それをレッドクラウンが鞭(むち)でギエン達の放ったビーム群に向け打ち飛ばした。さらに、その軌道(きどう)に風の気流を銀竜が加え、炎の鞭に打たれたクナイは、風の助勢(じょせい)に激しく燃え盛った。

「バーニングハート！！」

まるで砲丸投げ(ほうがんげ)の選手が、投擲(とうてき)してすぐに気合いを砲丸に込めるのと同じように、はるかが鞭でクナイを打ちながらそう叫ぶと、鳥影に似たクナイは、一層、激しく燃えてその形がハート型に燃焼していた。二人の力を融合(ゆうごう)させた会心(かいしん)の妙技であったのだが…。ギエン達の放った拡散(かくさん)ビームを相殺(そうさい)するに止まっていた。

「そんな....。」

自分の攻撃が相手の攻撃を粉碎(ふんさい)し、敵自体を倒す事を期待していたのにそうならなかったのも、はるかは焦(あせ)りを感じていた。

「アイツら強え一な。」

焦るはるかに、正友がそう言って冷静さを取り戻させようとした。

「どうしたらいいの？」

はるかはどうしていいか分からないでいたが、声をかけられて正友がいると思い、相談しようとした。が、そんな二人を引き離すかのようにギエン達の攻撃が始まった。

「とにかく今は戦いながら様子を見るぞ。」

正友も今の所は有効な手立てが見つからなかったようで、その言葉は、ただ逃げていると言う風にはるかには聞こえた。だが、夢中で戦いながらも、早い攻防の展開に慣れてきたはるかは、さっきの正友の言葉の意味が敵の弱点を探すように戦えという事なのだと理解し、よく相手の動きに目を凝らしながら戦い始めていた。

「どうだ！見つかったか？」

「そんなすぐに見つかるワケないじゃない！」

せっかちな正友の問いかけに、はるかは叱るようにそう言い返した。

(くっ...どうすれば...)

はるか達が苦戦しながらも必死に相手の弱点を探していた頃。秀樹も同じようにして、ケイオスインセクターの弱点を探し出そうとしていた。しかし、次から次にラグナクエストを襲う攻撃の渦(うず)。その渦中(かちゅう)にあって、相手を見る事にさえ困難であるのにどうすればいいのか。攻略の糸口を見出す為に必死であったが、その糸口の先端(せんたん)さえ見えてこない事に、焦燥感(しょうそうかん)と不安が押し寄せていた。

困惑(こんわく)した精神状態に、激しさを増すジャギの攻撃。対極的境地(たいきよくてききょうち)を味わいながらも、秀樹はそのハマった状況から脱却(だっきゃく)できないが故(ゆえ)に、ジリジリと追い詰められているようであった。当然ながら、秀樹とて黙ってジャギの攻撃を受け続けている訳ではない。だが、何度反撃を試(こころ)みようとも、ケイオスインセクターの形状変化の仕組みが分からないので、全てが無効化されてしまい、どうにもならないのであった。

「くッ、またか...」

伸び縮みして、あらゆる軌道(きどう)からやってくる数々の攻撃。迎撃(げいげき)しようとするのだが、何度やっても結果は同じで、攻撃を吸収されたり、剣を躲(かわ)わされ逆にカウンターを受けそうになったりするので、秀樹はそう言って手の施(ほどこ)しようのない現況を嘆(なげ)いているようであった。

「フハハハ。どうした、もう終わりか？」

勝利を手中(しゅちゅう)に収めたといった感じで、勝ち誇(ほこ)るジャギがそう言って秀樹をからかい、弄(もてあそ)んでいる。

「コレで墜(お)ちろッ!!」

ジャギはそう言ったが、ケイオスインセクターの発する攻撃は、さっきまでと同じように思えた。読みにくいとは言え、斬撃(ざんげき)での接近戦を延々(えんえん)と続けている内に、秀樹の目はその動きに慣れてきていたので仕留(しと)められる筈(はず)はないのだが――

「何ッ!？」

驚(おどろ)く秀樹。同じように思えた攻撃の中に、小さな点が混じっているのに気付いた秀樹だが、小さな点に霧(きり)のような物がまとわり付いたかと思いきや、瞬時(しゅんじ)にそれがケイオスインセクターの腕となり、攻撃をされると回避(かいひ)が間に合わないでいた。

「貴様、何を...!？」

そう言って、秀樹はケルビムに刺さった敵の刃を外そうとしたのだが。

「させるかッ!」

「うぐあああぁーッ...!!」

ラグナクエストに突き立ったケイオスインセクターの腕が強力な電流を流し、秀樹は悲鳴(ひめい)をあげるハメに陥っていた。

「はっ!?お兄ちゃんッ!!」

秀樹の叫び声を耳にしたはるかは、思わず集中力を欠いてしまっていた。その隙(すき)をダイキ達が見逃す(みのがす)筈(はず)もなく、光線でその隙を狙い撃ちにされた。ギリギリ致命傷(ちめいしょう)は免(まぬが)れたが、レッドクラウンの肩の一部が破損(はそん)してしまっていた。

「キャアアアアアーツ...」

その強力な光線の被弾による慣性(かんせい)に、バランスを失ったレッドクラウンが大きくフラついたので、コックピット内は大嵐が起こったような衝撃に見舞われ、その荒波に揉(も)まれ悶絶(もんぜつ)するはるか。

「死ねッ。」

ダイキは追いうちをかけたが、攻撃の第一波でバランスが崩れたのが照準(しょうじゅん)をずらせたのが幸(さいわ)いし、決定打を受ける事なく射程圏外へ脱する事に成功していた。

「はるかッ!!」

はるかの叫び声を聞いて、今度は正友が気を取られそうになった。

「お前の相手は我だ。」

「くっ...どけッ!!」

正友は両腕からスカイディパー（鱗勁刃）を出させると、銀竜をファラオスフィンクスへと猛突進させた。

「黄流鎌鼬(こうりゅういたち)!!」

はるか二人で秀樹の胸を借りた時、用いたウィンドブレイクという技に似た動きを見せた銀竜。単体での攻撃も近距離ではその威力(いりよく)において、決して引けを取らない物であったのだが。銀竜の刃は、ファラオスフィックスの無色の障壁(しょうへき)を突き崩す事ができないでいた。

「何ッ!？」

「フハハハッ。ピラミッドフォースは攻撃力を増幅させるだけではない！防御力も向上させるのだ。」

ギエンの説明を聞きに回った正友は、後方から迫りくるキラーカーリングに気付くのに、少し後れてしまっていた。

亀の姿に戻り、凄まじい速さで距離を詰めてきたキラーカーリングは、それ自体が超高速で回転しながら、銀竜へと突進してきた。その姿は、まるで凄まじい勢いで襲いかかる巨大な手裏剣(しゅりけん)のような動きであった。

とっさに危険だと判断した正友は、その軌道から逃げ出したが、今度はギエンの的にされていた。かろうじて躲しはしたが、銀竜は完全に体勢を崩してしまった。二人がかりの連続攻撃。次に打ち込まれたならひとたまりもない所であったが、レッドクラウンが再び戦線(せんせん)復帰(ふっき)し、事なきを得た。

「はるか。ひとまず退(ひ)くぞ！」

不利な状況に正友がそう言った。

「おのれッ、逃げるか！！」

はるか二人が逃げ腰になるのを察知して、ギエンがそう叫んだ。しかし、それを横目で見ているだけで、ギエンは追撃する事ができずにいた。何故なら正友に攻撃をしようとして、はるかの横やりを受け体勢を崩していたからである。

「あそこの隕石(いんせき)に隠れよう。」

「分かったわ。」

はるか二人は、その隕石に身を隠すと作戦会議を始めた。二人が身を隠した場所からは、地球を一望する事ができた。

「地球って綺麗(きれい)だな。」

冒頭で正友がそう呟(つぶや)いた。

「...そうね。」

正友の言葉に思わず同じ方向を見たはるか。そこに映る地球は確かに美しく、はるかは見とれながらそう頷(うなづ)いていた。

「正友、あなた何かあの宇宙人達の弱点とか見つかった？」

「うーん...分かんなかったなあ。」

「あなた、あの人達と話ししてなかった？」

「アイツらの技は、力を増幅させるとか何とか言ってたな。」

本題に入り、情報を交換してこれから対策を立てようとした矢先。地球を眺(なが)めながら話しをする二人の視野に、無数の飛行体の影が飛び込んできた。即座(そくざ)に敵と判断し、撃墜(げきつい)したのだが。続々と後続が現れ、見渡す限りをそれらが埋めつくしてしまっていた。

「逃がさんと言っただろ!!」

二人の耳に、ギエンの声が響きわたった。

「なんの真似だ？二対二の勝負のハズじゃなかったのか!!」

広大な宇宙空間に、数多に犇(ひしめ)く飛行体の包囲網(ほういもう)。一斉砲射(いっせいほうしゃ)がなされたがそれらを躲し、囲みを突破(とっぱ)しようとしたが、倒しても倒してもキリがない。敵を斬り刻みながら、正友がギエンにそう叫びかけた。しかし、ギエンはその呼びかけに何も返答をしない。

「ちきしょう...消し飛ベツ!!」

正友が大技で事態を打開(だかい)しようとしたのを見て、はるかがそれを助けようとした。

「サンフレアフラッシュ!!」

激しい光のストロボに敵の攻撃が止まり、その光の元となった熱量に近くの敵は灼(や)き尽(つ)くされてしまった。

「サンフレアストーム!!」

その熱源を利用し、正友は風を呼び起こすと、周囲の敵に次々と飛び火し、燃やしていた。飛び交う火の粉をくぐり抜け、はるか正友は焼け残った残党を掃討(そうとう)していった。全ての敵を討った二人の前にギエン達が現れた。

「もう逃げられんぞ。」

「どういう事だ？」

ギエンの言葉に正友がそう問いかけた。

「分かんのか？今、貴様らを襲ったのは無人の飛行機だ。それはまだまだ我らの手元にある。今度逃げたら地球へそれらの攻撃を向ける。」

「くッ...。」

「分かったな！」

「ああ...分かったよッ!!」

そう叫びながら、正友は銀竜をファラオスフィンクスへ向けて飛ばした。と同時に、はるかもダイキと戦いはじめた。が、どれだけ技を繰り出しても、ピラミッドフォースの厚い壁を破り、ギエン達の機体にダメージを負わせる事ができないでいた。

「ハハハハ。その程度か！」

ギエンは正友の攻撃を笑い飛ばした。

「なる〜...喰らえッ!!」

正友はムキになり、攻撃が大振りになってしまった。ギエンはそれを見逃さず、スフィンクスの前脚(まえあし)が強烈(きょうれつ)な一撃を銀竜に浴びせた。続いて攻撃を加えられそうになったが、風を使って互いのバランスを崩す事でピンチを脱していた。

(どうすれば勝てるの...?)

追い込まれる正友。敵の強大な力に、はるかは困惑(こんわく)の度合いを深めていた。敵の戦力を解明しなければ勝てる要素も見つからない。強さには何らかの原因があるハズで、色々と自分から仕掛けてそれを探ってみようとするのだが、うまく行かない事に実戦の難しさを感じていた。

「ジェットガトリングブラスト!!」

シャラポワ・ザンギエフを倒した時と同じような技をレッドクラウンで繰り出したが、やはり結果は同じ。はるかも正友も、攻め疲れをするのは時間の問題であった。だが、攻撃の手を緩(ゆる)めれば、逆襲(ぎゃくしゅう)されるのは必然なのでそれも出来ない。

はるかには攻撃をしながら横目で秀樹の戦っている方向を見つめたが、はるか達とは随分(ずいぶん)離れた所で戦っているようなので姿を確認できないでいた。ただ、かすかな光がチカチカしているのだけは見てとれた。さっきの叫び声から一体どうなったのか？心配であったが、それ以上に秀樹ならこの局面を何とか出来るのではという、すがりたい思いが先に立っていた。

「ぐあああ...」

はるかが視線を送ったずっと先では、苦しむ秀樹の姿があった。ケイオスインセクターが遠隔操作(えんかくそうさ)する腕に捕(つか)まり、激しい電流を流され続けていたからである。長時間に渡り電流を流され続けた事で、秀樹はかなり衰弱(すいじゃく)したようであった。

「終わりだーッ!!」

ぐったりとしたラグナクエスト。操縦者の指示を失くした所に、ケイオスインセクターが止めを刺そうと、伸縮自在(しんしゆくじざい)の腕を一斉(いっせい)に突き立てようとした。秀樹は絶命(ぜつめい)したと思い込み、ジャギは勝利の声を高々と上げた。

しかしー

「ブルーバタフライフィッシュ（烈空青海波）!!」

秀樹は気絶をしたフリをしていただけで、剣を振うと剣圧がケイオスインセクターの触手(しょくしゅ)を弾き返した。

「ぬおッ!?貴様...気絶したのではなかったのか？」

「電撃を使ったのは失敗だったな。」

「何だと....。」

「まだ分からないのか？純粋な水ってのは、ほとんど電流を通さないんだ。」

「まさか...!？」

「もうお前の技は通じない。」

秀樹がそう言うと、霧(きり)が辺りを埋めつくした。

「ほざけッ!!」

秀樹の余裕(よゆう)ある口調(くちょう)に、ジャギは激しく怒った。そして、ケイオスインセクターの体のほぼ全体を宇宙空間に沸(わ)いた霧(きり)に溶け込ませた。

「ケイオスネスト（混沌営巢内圧殺）！！」

ジャギがそう言うと、霧に溶け込んだケイオスインセクターの粒子状(りゅうしじょう)にまで細かくなったボディーが、ラグナクエストの周りに集まり、まるで大きなシャボン玉に包むようにすると、いきなり圧縮(あっしゅく)された。ラグナクエストは握(にぎ)り潰(つぶ)されたようになり、グシャグシャのスクラップ状態になったかのように見えたのだが――

「フハハハッ。どうだー!!」

高笑(たかわら)うジャギ。しかし、数秒後にはその高笑いはピタッと止み、変わって恐怖が訪れる事となる。

「それで勝ったつもりか？」

背後より秀樹の声がし、急いでジャギが振り向くと、ラグナクエストが健在(けんざい)しており。秀樹の放つ激しい気迫にジャギは気圧(けお)されてしまっていた。

「うおおおおおーッ!!」

その恐怖を振り払うかのように、ジャギはケイオスインセクターにラグナクエストを攻撃させた。しかし、背後をとったラグナクエストの姿は実体ではなく、霧の中へ溶けるように失くなってしまっていた。

「貴様あーッ!!ドコにいる!？」

「ここだ。」

秀樹の声がしたが、居場所が掴(つか)めないジャギ。下手に動けば危ないと思い、秀樹が仕掛けてくるのを待っていた。やがて影が見えたのだが、霧の中の至る所にその影は現れ、どれが本物か見分けがつかないでいた。

「スプレッドフライフィッシュ（海王連弾）！！」

秀樹の影が多重ミサイル攻撃を仕掛けると、反射する影も鏡のようにその姿となり、視覚(しかく)は混(こん)乱(らん)させられたが、絶対防御を自負(じふ)するジャギは冷静にその場に止まっていた。

やがてラグナクエスターの放ったミサイルは、次々に命中したのだが。やはりケイオスインセクターを打ち砕く事はできず、秀樹の居場所を突き止めたジャギが、そこへケイオスインセクターを全力疾走(ぜんりよくしっそう)させた。

「そこだッ。」

居場所さえ突き止めればこちらの物だと言わんばかりに、ジャギは威勢(いせい)よく攻撃を仕掛けてきた。しかし、急にケイオスインセクターの体が自由に伸縮(しんしゅく)しなくなり、どうにも動かなくなってしまった。

「なんだ!?!...どうして動かん???'」

あまりにも突然の出来事に、ジャギはひどく取り乱した。

「ミスティハイドカッティングエッジ[霧隠刃]。弾幕(だんまく)の中の目には見えない刃が、ある物に向かい飛んでいたのに気付かなかったのか？」

「何だと？」

ラグナクエストが何やら丸い物体を手をしていた。

「ま、まさか貴様!?!」

「そう、コレがケイオスインセクターの奇術のような動きの正体だ。」

ジャギはかなり狼狽(ろうばい)したようで、すっかり意気消沈(いきしょうちん)して戦闘意欲を喪失(そうしつ)していた。その姿が、秀樹の差し示した物体が、ケイオスインセクターの秘密を晒(さら)け出してしまっていて、かつその有効性を証明してもいた。

「貴様、どうやって我がケイオスインセクターの秘密を知った？」

現実ではもう敵(かな)わないと分かったが、どうして自分の弱点を知られたのか。どうしても納得のいかないジャギが、思わずそう口を滑らせていた。

「お前達の兵器は伝説の神獣(しんじゅう)を模(も)したり、語ったりしているが実際はただの機械で作り出した物でしかない。お前の操(あやつ)る機械の、構造や形態がどのような仕組みで機能しているのか？そのヒントを与えてしまう動きを、お前は自分でしでかしてしまったんだ。」

ケイオスインセクターの奇怪(きかい)な動きの原動力。それは、人間の等尺(とうしゃく)に当てはめるなら、ナノサイズにまで分解されたパーツ同士が組み合わさって構成されている。

奇術の種となる、その尻尾(しっぽ)をジャギは露呈(ろてい)してしまっていたのである。ラグナクレストのコクピットから秀樹が目撃した点のような物は、ケイオスインセクターの小さなパーツ同士の形状を、自在に操作する為の司令塔の役割をしていたのであった。

それは、例えるなら小さなパーツは分子の様な物で、それを物質にせしめていたのが”点”となっていたのである。軟体動物(なんたいどうぶつ)のようになり、時には消えたりするような曲芸とも見える事を、機械にさせるならどうすればいいのか？そんな思考回路で考えれば、ある程度、予測できる事だと秀樹は言った。

つまりは”核”となる制御装置(せいぎょそうち)があつて、トリッキーな動きが成り立っていたのである。生物の構造を真似た機械仕掛けの生物。腕が振って沸(わ)いたような常識(じょうしき)では考えられない光景を目にした時に、漠然(ばくぜん)としていた予測は具体的な確信へと変わっていたのであった。そこから核となる制御装置にも、色々あるだろうと予測した。

人体にも要所(ようしょ)の格差があるように、段階的な順位があると踏んだのである。そこで秀樹は、一番の要であると思われる部位に暗器を密かに送り込み、指示系統を台無しにした。人間で言うなら脳や心臓・神経と言った、人間が正常に人間として動く為の中枢機能(ちゅうすうきのう)を破壊したのである。

ケイオスインセクターという機械にそれを当てはめるなら、各部位を構成する為に必要な制御装置を統率する、制御装置を壊してしまっていたのであった。

「ま、まさか...そんな事が...。」

卓越(たくえつ)した知能を持つパーピリオン星人。その一員であるジャギは、秀樹達の間で言われる所の聴勁と言われるテレパシーでその事を悟(さと)り。今までに出会った事のない思考力の深さを持つ秀樹に、啞然(あぜん)とする他になかった。

「さあ、ここからは俺が反撃する番だな。行くぞッ!!」

「ヒィィィ…」

コントロールを失ったケイオスインセクターは、ただの粗大ゴミのように愚鈍(ぐどん)なガラクタ同然となり、なす術もなくラグナクエストに攻撃されるのを待つばかり。

凄まじいオーラと気迫にみなぎるラグナクエストの迫力に、ジャギは生まれて初めて悲鳴をあげた。そこには究極の生物を自負する誇(ほこ)りも面影(おもかげ)も何もなかった。

「沈めッ。オクトパスビート!!」

ラグナクエストの重い攻撃は、ケイオスインセクターの胴体(どうたい)の中心を重点的に狙(ねら)い打ちにした。柔軟性(じゅうなんせい)や伸縮性(しんしゆくせい)は失くなったが、元来の形のまま硬直(こうちよく)したケイオスインセクターの装甲(そうこう)は強力であった。しかし、全くのノーガード状態では、いつまでも耐えられる物ではなかった。

「もう一丁!!」

相手が防御不能なのをいいコトに、秀樹は執拗(しつよう)に攻撃を繰り返し、ついにケイオスインセクターの装甲をボコボコにし、内部にいるジャギの意識をその衝撃により失わせる事に成功していた。

「…終わったな。」

勝利を確信した秀樹は、休む間もなくはるか達を探し始めた。広大な宇宙で戦っている内に、かなり遠くへとはぐれてしまったようで、はるか達の気配を察知し、その方向を秀樹が見てみると、かすかに光が飛び交っているのを目視するのがやっとであった。

その微(かす)かな光は4つ点在しているのが見て取れ、はるか達が無事であることを知り、秀樹は安堵(あんど)した。

しかし、いつまでも胸を撫(な)で下ろしてもいられない事に気付いた。はるか達の声が頭に響いてきたからで、相当に苦戦をしているような感じであった。

「はるか！」

「お兄ちゃん！無事だったのね。」

「ああ。すぐに行くから、もう少しだけ頑張れよ。」

「うん！」

秀樹とはるかの通信を傍受(ぼうじゅ)したギエンが、驚いた感じで会話に割り込んできた。

「貴様、まさかジャギを倒したというのか!?!」

「ああ。割かし手こずったけどな。」

「面白い！コイツらを倒したら、後で我と戦えッ。」

秀樹はそのギエンの言葉に、一瞬だが呆気(あっけ)に取られた。仲間が倒されたというのに、ギエンには敵を討つという意識はおろか、悔(くや)しがる素振りさえも見せず、むしろ秀樹の強さは自分の力量を試すのに持ってこいだと対戦を楽しみにしている。

その情のなさには、呆気(あっけ)にも取られ、且(か)つ不愉快(ふゆかい)な感情にもさせられてしまう。だが、それも究極の生物という彼らの特徴なのかなと思うと、その不愉快さも一気に冷めてしまった。

秀樹自体は心ある人間であり、パーピリオン星人なる未知の生物の気持ちは理解できないが、究極(きゅうきよく)を自負する彼らの心理を推し量る事はできる。自分達を神のように思っている者達にとって、仲間だとか命だとか、そんな人間的な感覚に重きは置いていないのだと理解できたのである。

神と自負(じふ)するからには、おそらく彼らは彼ら自体でどんな事でも叶えられる能力を持っており、従(したが)って誰かに頼るとか助けてあげる等という意識もない、なので、自分以外の存在には興味(きょうみ)もなければ、その存在の有難(ありがた)みも分からないのであろう。言わば唯我独尊(ゆいがどくそん)状態(じょうたい)で、究極の利己主義者(りこしゅぎしゃ)達の集りなのだと思えば、人間とは明らかに違う生物なので、彼らをどうこう言う立場ではないと、秀樹は割り切っていたのである。

「よく聞け、はるか。」

「うん。」

「敵の強さには必ずカラクリがある。よく観察(かんさつ)して戦え！」

「うん、分かったわ。」

秀樹がもうすぐ駆けつけてくるという事で、精神的に少しゆとりの出来たはるか。リアルタイムで状況が変わり続ける戦場で、精神面や心理面で後れを取る事は、敗北にも繋がりがねない重要な要素で、ちょっとした事が、時を重ねるに従い大きな痛手となる事もある。

だが、良い兆候(ちょうこう)が現れると、どんどん良くなる物でもあった。秀樹の言葉に元気になったはるか。頭の回転もそれに呼応(こおう)してスツキリし、良いアイデアが浮かびそうな予感に心も明るくなる。無論(むろん)、それはただ秀樹の言葉だけでそうなったのではなかった。秀樹の言葉は、ただのきっかけで、戸惑(とまど)っている間にも、はるかは敵を攻略する為の布石(ふせき)を打っていたのである。

「ジェットガトリングブラスト!!」

「まだ懲(こ)りぬようだな。その技ではこのギエン様に傷一つ負わせられぬ

わッ！」

“どうすれば倒せるのか？”それはこの鉄壁(てつぺき)の防御を破らない事には始まらない。心理戦で先を越され、苦しい展開に長々と考える余裕が持てないでいたが、そこから単調ではあっても、激しい攻撃を繰り返す事で、自分のリズムを徐々に取り戻し、鉄壁の防御を破る方法を探っていた。

どのようにして破るかという疑問から、どうすれば破れるかという方法論への思考の前進。両者は同じような言葉のように思われがちだが、前者は相手の強さに焦り、何から手を付ければいいのか分からない状態であり、後述の言葉には、相手の弱点を見つけ克服(こくふく)しようとする、事態打開への取り組みが見て取れる。

単調な攻撃は思考の前進を押し進める為に、はるかが仕掛けた作戦で立った。その時間かせぎをしている間に、正友の言葉を思い出したはるか。

(もしかして!?)

鉄壁の防御を破る方法について閃(ひらめ)いたのか、はるかの攻撃の手が一瞬だが緩んだ。

「どうした！！攻め疲れたか？」

その一瞬の隙を見逃すギエンではなかった。際(きわ)どいタイミングで、何とかレッドクラウンは攻撃を回避した。

「いいぞ。よく躲したな！だがそろそろ限界だろう。」

したり顔でギエンはそう言い、次の攻撃に移ろうとした。

「フッフ...次で終わりだ。フルパワーで行くぞ！」

「待って！」

「どうした命乞(いのちご)いか？」

「違うわ。次の攻撃はヤメにした方がいいわよ。」

「何だと？」

先程のピンチから一転し、はるかが自身を覗(のぞ)かせそう忠告(ちゅうこく)する。しかし、勝つと思っ込んでいるジャギには、その意味が理解できない。

「強がりおってえ〜。死ねッ!!」

フルパワーでビーム攻撃をしようとエネルギーを集中させようとしたのだが...

「な、何ィッ!？」

ピラミッドフォース内で、突如(とつじょ)大爆発が起こっていた。先程のピンチに陥った時、はるかはピラミッドフォースの内部に圧縮した炎を送っていたのである。高圧をかけ、微細な空間に圧縮した炎。それをどう送ったのかと言えば、ピラミッドフォースのバリケードに穴が空いた時であった。

鉄壁の防御壁は、強力な磁場の成せる物なのか何なのかは定かではなかったが、確かな事はその壁も自らが攻撃を行う際には、開放せざるを得ないという事。それを知ったはるかは、穴が閉じる瞬間を見計らって炎を忍び込ませたのである。そして、強力な力をファラオスフィックスが発しようとした時に、引火させていたのであった。

「ま、まさか!?一体、何があったというのだ...。」

「あなたの技はもう通じないわよ。覚悟しなさいッ!!」

「ピラミッドフォースを破ったくらいでいい気になるなよッ。」

その台詞をギエンが言い終えぬ内に、少し離れた位置から爆発音らしき物音がした。

「何だ...この音は!?...ぐわッ...!!」

爆音の直後。風と共にキラカーリングが吹き飛んできて、ファラオスフィックスに衝突してきた。

「ぬうう...これはダイキではないか...!?!」

「そうだよ。お前ら、ブッ飛ばされる覚悟は出来たか？」

銀竜と共に現れた正友がそうギエンに話しかけた。

「貴様も、我らのピラミッドフォースを打ち破ったというのか？」

「アンタが相手してる女の子に教えてもらったんだよ。それより、ブッ飛ばされる心の準備は出来てんのかって聞いてんだよ！」

正友はテレパシー（聴勁(ちょうけい)）で、はるかからピラミッドフォースの弱点を教わり、ダイキを機体ごと吹き飛ばしていた。混乱していた立場が入れ換わり、狼狽(ろうばい)するギエン達。

「おい、聞いてんのか？今からお前らブッ飛ばすよ！究極の生物さん。」

「...おのれ〜ッ。たかがこんな技を破ったからって、いい気になるなッ。」

ギエンはそう言って強力な電流らしき物を送ると、ダイキの意識を回復させ、申し合わせて突撃してきた。

「はるか！アレ行くぞッ!!」

「分かったわ!」

「九天霸王剣！！」

銀竜が太刀(たち)を振うと、矢の如(ごと)き風の気流が生まれた。

「アストロメテオカリバー（星煌火聖剣）!!」

レッドクラウンが大剣で炎を起こし、その気流に乗せると、相乗効果(そうじょうこうか)で炎は増々燃え盛った。

「デザートハードウェザリング！！」

二人がそう叫ぶと、炎は更に強さを増した。

「その程度の炎で我が装甲はビクともせんわッ。」

激しい炎は単発的に起こり、気流の中に点景(てんけい)となっていた。激しい炎をくぐり抜けると、強風が吹き荒れるの繰り返し。宇宙空間は地表と違い、熱の籠(こも)る場所がないので、とてつもなく寒い。点景の炎を掻い潜り(かいくぐり)熱せられたギエン達の機体は、次の炎に見舞われるまで、激しい冷気に襲われた。しかし、その炎と冷気が交互に襲う空間を、ものの見事に通りきったファラオスフィンクスとキラーカーリング。

『死ねッ!!』

ギエンとダイキは同時にそう叫びつつ、逆襲しようとしたのだが。

「何だと!？」

真っ先にレッドクラウンと斬り合った、キラーカーリングの斧が粉々に砕け散った。同じように銀竜に襲いかかったファラオスフィンクスも、爪をボロボロにされ、両機のパイロットが困惑するのも束の間に、はるか正友のケルビムによって、打ちのめされてしまった。

「うごおおお...。」

「うごおあッ...貴様ら何をした？」

衝撃に悶えるダイキ。ギエンが息も絶え絶えにといった感じで、はるか達を睨(にら)みつけながら、自分達を打ちのめした技の秘密について尋ねた。

「馬鹿ね。あれだけの熱と冷気を交互に浴びたら、どんな堅い金属だって組織がバラバラになって、脆(もろ)くなるに決まってるじゃない！」

ギエンは「はっ」とした顔つきをした。

「そうだよ。究極の生物の割に頭が悪いんじゃない？」

正友が得意気にそう言った。

「うぬう...。」

ギエンは悔しさを噛みしめていた。言い返したかったが、はるか達の言う事はもっともで、言い返せない事に歯がゆさを感じながらも、何も言えないでいた。

「`鹿(しか)を追う者山を見ず、って所かな。」

駆けつけた秀樹がそうギエン達に言い放った。

「ぐぎぎぎッ...。」

ダイキは、ショックにまだ口が聞けないでいる。

「お前達は俺達を倒す事ばかり考えて、自分達が負けるなんて夢にも思っ
てなかった。究極生物か何か知らないが、その驕(おご)り高ぶる気持ちが自滅
(じめつ)を招(まね)いたんだ！」

「まだ負けてはおらん!!」

「ぐぎぎぎッ...そうだ!!」

ギエンの覇気(はき)に、ダイキを鼓舞(こぶ)されたのか。二人は再び戦う意志を示し、秀樹の言
葉を否定した。

「もうヤメとけて。」

「うるさいッ。」

正友の忠告をダイキは突っ撥(ば)ねた。すると、さっき秀樹にのされたジャギが、ケイオスイン
セクターと共に、その場に加わって来て、再び戦う姿勢を見せた。

—次章へつづく—

バトルボーラーはるか
第二集 星間戦争
第4章・宇宙(そら)へ

<http://p.booklog.jp/book/60273>

著者：Ψ (Eternity Flame)英 樹(はなぶさ いつき)
著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>
ブログ<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame) 秋乃空(あきのそら)
ブログ<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントかブログへお願いします
<http://p.booklog.jp/book/60273>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/60273>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社：株式会社ブックログ